



第19期定期総会が開催されました

副代表 佐野 英樹

令和5年4月22日（土）、第19期定期総会が開催されました。

小澤代表を議長に、石川理事を書記にそれぞれ選任し、柏木理事の司会で総会を進めました。

第一号議案として、第18期の全般的な活動状況を小澤代表から、NPO 法人としての埼玉県への報告内容を吉井理事から、道路・水辺のサポート制度の取り組みを佐野副代表から、小彼岸千本桜の活動状況について小沼副代表からそれぞれ報告されました。

第二号議案として、5件の助成事業（イオン環境活動助成事業、サイサン環境保全基金、子どもゆめ基金、ヒマワリ助成）のそれぞれの成果が報告されました。つるがしま里山サポートクラブの決算報告が牛島理事からなされました。永年の活動に対して、「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰と彩の国埼玉環境大賞優秀賞の二つの表彰を受けたことが報告されました。

第三号議案として、19期の助成事業（イオン環境活動助成事業、武蔵野銀行緑の基金、子どもゆめ基金、サイサン、他）の概要が報告され、つるがしま里山サポートクラブの19期予算計画書が牛島理事から提案されました。

18期の活動報告と決算報告、19期の活動計画と予算計画書は満場一致で承認されました。

18期は年間の活動回数が60回、延べ参加会員数が670人と活動が拡大しています。一方で活動資金に余裕の無い状態となっています。活動を今後も継続するためのいくつかの提案がなされました。

- 1) 安定した活動資金が得られる各種基金に応募したい。
- 2) 同じ理由で周辺企業へ法人会員としての参加を呼び掛けたい。
- 3) 鶴ヶ島市から支援が受けられるように働きかけてはどうか。
- 4) 正会員の平均年齢は現在70.4歳で高齢化している。拡大している活動に対応するため若い会員を増やしたい。

定年後の私

鈴木 寿男

小生の定年は会社規定の五年後の満65歳、現役時は定年後について何も考えておらず、先輩・同僚に相談した結果、家庭菜園は楽しいとのことで、市役所主催の農業塾に応募六ヶ月の研修後、役所の好意で菜園の紹介を受け62歳から77歳まで一日2時間程度栽培を行いました。

また、定年後の数週間は制約も受けずバラ色でしたが、環境変化についていけず再就職も考えたが、現役時に戻る感じとなるため、時間的に余裕があるシルバーに登録、小学校の校務員を短期間勤めました。

もう少し自由気ままに過ごせないかと考えた末、日本野鳥の会埼玉支部に入会、途中より会員の紹介で自宅より近場の高麗川ビオトープの探鳥会に入会、昨年9月に退会。

他に神社仏閣を東京・埼玉の古刹を中心に縁起を調べ写真に纏め上げ、神社検定を受け終了。

次は、明治から昭和初期まで由緒ある建造物を都内中心に写真集を制作。

昨年8月より里山サポートクラブにお世話になり、皆様の創意と応用力に驚くとともに、里山の景観・保全及び学童自然体験へのサポート力に敬意表します。

微力ではありますが協力させていただきます。



4月～6月の主な活動

太田ヶ谷の森に毎年植樹している小彼岸桜は3年経ち大分成長しました。今年も植樹と剪定作業を行いました。

五味ヶ谷の森では親子で筍掘り体験を行いました。今年は4月と5月の二回です。不作の年と豊作の年が交互に起きていて、竹林の伐採方法の検討が必要のようです。小彼岸桜の新芽採取の当日は気温が高く、その後の発根が芳しくなく、このような日の採取方法の工夫が課題となりました。

市内を流れる大谷川と飯盛川の清掃活動も例年とおり実施しました。ごみ量は減少ですが雑草、樹木の伐採に労力が必要です。両川に蛍を復活させようとアメリカザリガニの駆除活動も開始しています。

市の環境まつりは縄織い機を搬入し、今では作業を子供から大人まで体験していました。藤小学校三年生の野外授業の支援は4回シリーズで藤金の森で開始しました。各2時限の授業を藤金の森で実施するのは貴重な体験となるでしょう。



4月～6月 活動実施

- 4/05(水) 太田ヶ谷の森 小彼岸桜の剪定等
- 4/22(土) 家族手楽しむクワ掘り、定期総会
- 4/23(日) 太田ヶ谷で蛍幼虫の放虫
- 5/05(金) 家族で楽しむクワ掘り体験
- 5/10(水) 小彼岸桜新芽採取
- 5/21(日) 大谷川クリーン大作戦
- 5/27(土) 飯盛川清流復活大作戦
- 6/01(木) 逆木倉庫増設
- 6/04(日) 里山体験会 in 高倉の森
- 6/05(月) 藤小学校野外学習
- 6/10(土) つるがしま市民環境まつり
- 6/16(金) ペル協力
- 6/28(水) 太田ヶ谷の森植樹

7月～9月 活動計画

- 7/22(土) ボランティア体験会 in 五味ヶ谷の森
 - 8/05(土) もろやまプレーパーク応援
 - 8/12(土) ボランティア体験会 in 高倉の森
 - 8/23(水) 会員親睦バーバキュー
 - 8/26(土) ボランティア体験会 in 藤金の森
 - 9/02(土) 里山体験会 in 藤金市民の森
 - 9/13(水) 逆木倉庫清掃・整備
 - 9/30(土) 樹木医指導 in 太田ヶ谷の森
- スケジュールは雨などで変更が有りますので、当クラブ HPで確認下さい。

最近のトピックス

編集部

■鶴ヶ島市民環境まつりの開催

毎年行われてきた、環境月間の環境まつりが4年ぶりに開催されました。近年益々環境に対する人々の意識が高まっています。鶴ヶ島市では「ゼロカーボン宣言」を行いました。企業や団体が多数参加し、展示や体験会を実施しました。当クラブは展示と、小彼岸桜の無料配布と、廃棄される畳表を使用した縄織い機の体験会です。昔これで働いたことのある年配の方、見たことがあるというお父さん、初見の青年や子供たちが興味深々に体験していました。

■ベンチプロジェクトの本格化

市と社協が推進する福祉ベンチプロジェクトが始動し、昨年度は鶴ヶ島ほほえみの郷と一本松7号公園に寄贈しました。本年度も市から3件の打診を受けています。このベンチは市民の森で間伐したりナラ枯れした樹木を伐採したりした丸太を材料に製作しています。森は適度に若い木に世代交代させると、二酸化炭素の吸収が活発になるので温暖化対策になります。森の樹木の活用を進めるのも大事でしょう。

■第34回「みどりの愛護」功労者として国土交通大臣より表彰されました。

花と緑の愛護に顕著な功績のあった民間の団体に対し、その功績をたたえ、国民的運動としての緑化推進活動の模範として、「みどりの愛護」功労者として国土交通大臣表彰の受賞団体(88団体)に、当クラブも選定され、感謝状が授与されました。

瀧島の井戸周辺の保存について

副代表 小沼 英二

市内を流れる大谷川の源流はいくつかあり、東大谷川とよばれる源流は、その一つが農大跡地に開園した鶴ヶ島グリーンパーク内の「太田ヶ谷の森」の中にあるビオトープ周辺でもう一つが「瀧島の井戸」になります。二つの源流は合流し太田ヶ谷沼に注いでいます。(下図参照)

太田ヶ谷の森の東側に隣接する瀧島の井戸を含む12haの土地に埼玉県はロボティックセンターを建設し、令和8年開所することとなりました。計画構想が出た段階で、湧水地である瀧島の井戸は歴史的にまた、自然環境的に非常に大切なものであることから保存できるよう市内の環境団体連名で埼玉県に要請しました。その結果、ロボティックセンター内で瀧島の井戸周辺を現状維持しながら保存することとなりました。

瀧島井戸周辺は里山会員の大森さんが11年間畑地として管理・維持してきた場所であり、井戸周辺には各種桜を植樹してきた場所でもあります。今年の3月末で埼玉県に引き渡すにあたり、瀧島の井戸に堆積してきた土砂の除去と土手周辺の整備をしたところ、井戸の湧水が復活し、従来以上の流れが生じています。

ロボティックセンターができると立ち入り禁止場所となりますが、埼玉県で保全・管理し湧水が途切れないようお願いしたいと願うところです。



藤金市民の森について

理事 吉井 優

里山クラブが、藤金地区で活動を始めたのは、2006年に地元の方々が道路と水辺の里親制度（現サポーター制度）により、西大谷川の清掃活動をしており、その代表から、協力依頼を受け、我々も参加しました。2016年までは、奇数月第4週日曜日に、ゴミ拾いと葎切り作業を行っていました。

こうして、大谷川清掃活動を続けていると、隣接する樹林地が目に入り、森と川を備えた理想的な里山環境と認識しました。この樹林地を市民の森にすべく2008年に、鶴ヶ島市の市民協働推進事業に提案したところ認定され、2010年には、地主さんと市民の森契約が結びられました。2011年から埼玉県の「里の山守活動支援事業」の補助金を受け、藤金市民の森整備を進めてきました。篠竹刈りから始め、枯れ木を伐採しました。これにより人の侵入を阻んでいた雑木林が明るい樹林地に変わりました。これで地域の方々に愛される市民の森となりました。県のみどり自然課職員が視察に来た際は、埼玉県内でも、良く整備された良好な雑木林であると評価されました。

藤金市民の森は、北側広葉樹林地48アールと、西側混合樹林地40アール、南側竹林18アールから構成されます。北側広葉樹林地は、コナラ、ミズキ、ヤマザクラ、イヌザクラ、ウワミズザクラなど、落葉広葉樹が生い茂り、鶴ヶ島の代表的な植種を集めた里山雑木林です。春は新芽が一斉に芽吹き、夏は緑濃く木陰を作り、秋は紅葉に包まれ、冬は落葉して、見晴らしの良い樹林地となります。ここは、イスとテーブルを設置したこともあり、散歩される方、休憩される方、のんびり雑木林を楽しみたい方などが訪れ、楽しんでもらっています。樹木と小川のせいで夏は涼しく、冬は落ち葉で温かみの感じられる市民の森になっています。そろそろ伐採時期ですので、間伐して、萌芽更新で再生すれば、良好な里山環境が保たれます。食用のウワミズザクラが大量に自生することもあり、生体系サービスの豊かな里山環境と言えます。

前回に引き続き、コオロギの話題になります。コオロギは分類的にはバッタ目コオロギ科に属しています。バッタが草食なのに対してコオロギは雑食で他の昆虫なども食べます。

埼玉県にはコオロギの仲間が 30 種類位いることになっていますが、埼玉県昆虫誌で鶴ヶ島に記録のあるコオロギを調べてみたところ、ツヅレサセコオロギ・ミツカドコオロギ・エンマコオロギ・アオマツムシ・カンタンの 5 種類だけでした。しかし、調べていないだけで実際にはもっと種類がいると思っています。

古くから日本人はコオロギやキリギリスなどの鳴く虫を好んだようで、平安貴族は「虫聞き」といって、虫の音を聞きながら酒宴を催していたといわれています。そして江戸時代中期の泰平な世の中では虫籠に「秋の虫」をいれて売り歩く「虫売り」という職業を営む人が出てきて、虫の音を聞く文化が庶民にも広まったといわれています。また、「こおろぎ・こほろぎ(蟋蟀)」は俳句では秋の季語とされ、「つづれさせ(綴刺)」も同じ意味で子季語として使われています。

ツヅレサセコオロギは畑や草地など、どこにでも普通にいる 2 cm くらいのコオロギで、顔に黄白色の模様があります。「リー・リー・リー」という鳴き声は、名は知れずとも一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。そして秋が深まって冬が近づくにつれ、だんだんと声が弱々しくなり儂さも増してゆく気がします(褒めすぎ?)。

ミツカドコオロギはツヅレサセコオロギに似ていますが、顔の正面が平面で角ばっていて、見た目も面白いコオロギです。鳴き声は「ジッ・ジッ・ジッ」と短く鳴きます。

エンマコオロギは 4 cm 近くになる大きなコオロギで「コロコロリー」の鳴き声は誰もが知っていますね。名前も閻魔大王のエンマからきているというのは有名な話です。

ところで最近、コオロギが食材として注目されているのをご存じの方はいらっしゃいますか? 昆虫食は、2013 年に国連食糧農業機関 (FAO) が食糧危機の解決手段の 1 つとして報告書を提出したのが始まりです。使用される種類としては、フタホシコオロギ・ヨーロッパイエコオロギ・タイワンオオコオロギなどが知られています。

コオロギ飼育のメリットとして、まずは飼育交換率が高いことがあげられます。飼育交換率は食料 1kg の収穫を得るために何 kg の飼料が必要かを示す数値ですが、だいたい昆虫は 50% (2kg) で牛は 10% (10kg) ですから圧倒的に有利です。そして世代交代が早く大量飼育できる・環境負荷が低いなどがいわれます。デメリットは、昆虫を食べることに嫌悪感を持つ人が多い。鮮度が落ちやすい。甲殻類アレルギーの問題・感染症の原因になる可能性がゼロではない。漢方では微毒で不妊薬のため妊婦は禁忌など、安全性を担保するためにクリアせねばならない点が多いようです。

このような不安材料を払拭してビジネスとして成功させる目的で、国内では「昆虫ビジネス研究開発プラットフォーム (iBPF)」から令和 4 年に「コオロギ生産ガイドライン」が出されていますが、輸入物については会社名や生産方法などを確認しておくのが無難です。(鶴ヶ島の自然を守る会・大越昆虫館運営委員)



ツヅレサセコオロギ



ツヅレサセコオロギ



ミツカドコオロギ



エンマコオロギ

編集後記

「不易流行」は松尾芭蕉が「奥の細道」の旅をする中で体得した概念だと言われています。「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」というものです。里山サポートクラブはこれからも新しい仲間の知識、経験、英知を受け入れ脱皮を続けて参ります。 : <http://www.satoyamasupport.com/>